

現地教育から学ぶ、よりよい外国語活動を行う手立て

—— 英語・フランス語会話学習を通して ——

前ブラッセル日本人学校 教諭

京都府京都市立鏡山小学校 教諭 久保充代

キーワード：在外教育施設、ベルギー、英語、フランス語、小学校外国語活動、国際交流

1. はじめに

現在日本では、小学校5・6年生を中心に『Hi, Friends』が普及し、担任中心の外国語活動が行われている。現時点で外国語活動における課題がいくつかある。担任（指導者）の苦手意識の克服や、活動内容と教材の充実、ALTの効果的な活用（連携）、評価の充実、中学校との連携などである。さらに教科化も視野に入れた準備が進んでいる。

そこで今回は、児童が外国語に親しみ言葉を習得するために、ブラッセル日本人学校の外国語講師が授業においてどのように工夫をしていたかを紹介し、今後の日本の学校現場におけるよりよい外国語活動を行うための手立てを模索したいと考えた。

2. ベルギーの言語とブラッセル日本人学校の外国語教育

(1) ベルギーの言語

ベルギーの国土は、使用言語により3つの言語共同体に分かれている。それぞれに地方公用語があり、北部のフランデレン地域の大半はオランダ語（フラマン語）、南部のワロン地域は大部分でフランス語（ワロン語）が公用語となっている。ただし、ワロン地域のごく一部ではドイツ語が公用語である。それぞれ、オランダ語が60%程度、フランス語が40%程度、ドイツ語が1%未満となっている。首都のブリュッセルはフランデレン地方に囲まれているものの、フランス語話者が8割以上を占めている。

(2) ブラッセル日本人学校の外国語教育

ブラッセル日本人学校はベルギーの首都ブリュッセル（フランス語圏）に位置する。本校では外国人講師を中心に外国語教育の指導を進めている。児童・生徒の英語力・仏語力の向上を目指した特徴的な取り組みとして、小学部1～4年生は毎日25分、小学部5、6年生は週3.5時間、中学部では週3時間の外国語授業を設定している。外国語活動は小学部1、2年では仏語必修、小学部3年生から中学校3年生までは仏語、英語から選択することができる。低学年は現地幼稚園から入学する児童も多いため仏語授業となっているが、各家庭のニーズに応じて学習する外国語を選択できることが大きな特徴である。

3. 外国語授業の工夫

(1) 使用教材

それぞれの言語によって最適な教材を外国人講師が選ぶことになっている。例えば小学部6年生は、英語ではLongmanのNew Stepping Stonesを、仏語ではHachetteのSuper Maxを使用している。読むときや話すときの視覚支援だけでなく、書き取りがしやすいようにも工夫してある。また、この他にプリント教材も使用している。

(2) 教室における視覚支援

教室には、季節、月、曜日、アルファベット、数字、天気などのカードが掲示してあり、毎回授業の最初に確認する日付や天気を答えるときに児童の助けとなっている。

またフランス語には、英語にはない動詞の活用表がある。主語が違えばフレーズ自体が変わる場合があり、しばしば学習者が混乱する。このことが、英語学習時と異なり、フランス語を学ぶ上で学習者の足を引っ張る要素

でもある。しかし、学習初期の段階では間違っただけの活用を正すことでなく、「フランス語に親しむ」ということを大切にしている。そのため、レベルが上がってきたら必要に応じて壁面の動詞活用表を使い、正しい会話につなげていけるようにしている。

(3) 歌・チャンツ

歌やチャンツを利用することによって、日本語とは違う、外国語のフレーズや発音、リズム、イントネーション等を自然に吸収することができるため、外国語の習得に効果的だと言える。一度覚えると頭の中に残ることが多いので、単語やフレーズを覚えることもできる。

低・中学年では歌を好んで歌う児童が多く、高学年では、歌よりもチャンツが児童の興味をひくことが多かった。

(4) 読むこと

子どもは読むことが好きである。本校図書館前には、英語とフランス語の本が置かれていて、いつでも借りることができる。たとえ言語が分からない児童でも、絵を見ることで異文化に親しむことができる。

また、階段にはベルギーとイギリスのニュースが掲示されていた。子どもたちが普段通る場所に掲示することで、自然と言語を習得できるようにと工夫がされている。

さらに、会話授業では学習者のレベルが上がると、プリント1枚分の話を読むことがあり、それを一通り読み終えた所で、児童はもう一度指導者の後に続いて発音する。その後、プリントの余白部分にお話の中の絵を描いた。このようにすることで、さらに理解が深まる。学習したプリントは一枚一枚を丁寧にファイルに挟みこんでいき、全ての話が終わるころには、本当に一冊の本のようになる。児童の達成感は大きかったようだ。これらのプリントは毎回講師が準備しているものだが、原文より理解しやすいようにと、簡単な言葉に書き換えられている場合もある。学習者にとって、「読む」という適度な負荷をかけるとき、続けることができるように単純な言葉にすることも時には必要である。

(5) ほめ言葉

英語の学習初期段階では、指導者は Very good. /Good job. /Well done. /Super. /great. などの簡単な褒め言葉を使用するが、学習レベルが上がると How can you ~? (どうやって~できたのですか?) と、うまく作業を終えた児童に対して、さらにコミュニケーションを取り続けられるようにするなど、学習レベルに応じたほめ言葉が子どもたちのモチベーションを上げていることが分かった。

仏語会話でも, très bien. (とてもいいですね。), genial/super/ (すごいです。), formidable./ merveilleux./ magnifique. (すばらしい。), Bonne chance !/Bon courage ! (がんばって!) などの褒め言葉 (あるいは応援の言葉) は頻繁に使われ、児童の学習意欲を高めることに効果があったといえる。

(6) ゴールの設定

右の写真は英会話の面白いゴール設定である。「動物の名称」、「体の部位」、「国の名称」、「できること」、「大きさ」、「色」を学習した先に待っているのが、この「The Crazy Animal Zoo」だ。自分が創り上げた架空の動物は、何という名前で、体の部位はどの動物のもので、どこに生息していて、そしてどのようなことができるかという説明も詳しく書くことができていた。

時間をかけて楽しく学習ができる工夫がされていて、大変面白い。このような経験をするのが「もっと外国語を知りたい、聞きたい、話したい。」という更なる意欲につながると考えられる。このほかにもゴール設定として、オリジナルのお店屋さん



になったり、街の地図を作ったり、様々な工夫が凝らされていた。

また、仏語会話選択者は、実際にお店に出かけていき、フリッツ（フライドポテト）を注文するという活動も行った。現地の言葉を習っているからこそ、学習を生かすことができ、また達成感を味わうことができるものである。本校では現地校との交流学习も行っており、これも「話そう」という気持ちを高めるための大切なゴール設定であった。



4. まとめ

今回の研究で指導者が、視覚支援、歌やチャンツの利用、褒め言葉の習得、ゴール設定の工夫などを行うことが、学習者の意欲と学力を高めるために重要であることが分かった。私たち教員が様々な教材を工夫して、習得の先にあるゴールのバリエーションを増やしていく努力をすることが、今後のよりよい外国語活動を行っていくうえで不可欠ではないだろうか。また、そのことが今後の日本での外国語活動における課題解決の一助となると考える。